

医啓会だより

秋号



発行元
医療法人社団医啓会
発行責任者
松本 正道
発行日
2021年10月1日
VOL.11

うつさない・うつされない、秋～冬は感染症が大暴れ

新型コロナウイルス感染症



約2年近く猛威をふるっているコロナウイルスによる感染症です。世界各国で次から次へと変異株が発生、非常に感染力が強く重度の肺炎を引きお越ししたり生命に関わる可能性がありますので罹らないよう予防することが重要です。



新型コロナウイルス感染症やインフルエンザにうつらない、うつさないためには



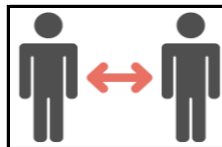
外出時はマスクを忘れないように



石鹸やアルコール手洗いや消毒を



人の多い場所には行かない



他の人との間隔は1.5～2mあける



多人数での飲食や大声の会話は自粛



30～60分毎に部屋を換気する

インフルエンザ



毎年秋から冬になると子供から高齢者まで感染者が増加、重症化すると肺炎になる場合がありますので、罹らないように注意することが必要です。予防接種もお早めに。

インフルエンザ予防接種受付中!!

ノロウイルス胃腸炎



激しい腹痛・下痢・嘔吐を伴うノロウイルス胃腸炎は11～2月頃に流行し、感染力がとても強く人や食品を通して感染します。予防接種はありません。おかしいなと思ったらすぐに受診しましょう。また嘔吐や下痢で脱水症状にならないよう水分をとりましょう。



ノロウイルスなど感染性胃腸炎や食中毒に罹らないようにするには



帰宅時にはうがいを



食事前には手洗いを



加熱調理を徹底する



調理器具を消毒する

おかしいなと思ったらすぐに受診しましょう

クリニックにお越しの際は必ずマスクの着用をお願いいたします
またご来院時の手指の消毒と検温にご協力ください

サービス付き高齢者向け住宅「おもいやり」をご紹介します



個室は洗面・トイレロッカー付きです



広くお洒落なホールで食事や憩いのひと時を



車椅子でも寝たままでも安心の入浴を

お問い合わせは

078-981-5639

までお気軽に

医療法人社団医啓会は地域の皆様と共に…



医療法人社団医啓会 理事長 松本正道

松本医師が医療を志し、松本クリニックを開設し地域の皆さまと共に歩み続けて今年で34年が経ちました。

試行錯誤の若き日々から、地域医療の在り方について確信の今日に至るまでの思いと軌跡、更に今後に向けての目標がインターネットを通じて多くの人や様々な業界を対象に配信されています。

CHALLENGING INNOVATOR

(挑戦し続ける革新家)

と題して配信されている内容をご紹介します。

医療と介護の一体化 そのカギは有床診療所にあり

関西の温泉地として有名な有馬。その有馬で30年以上にわたり地域の人々の健康を守る医師がいる。医療法人社団医啓会の理事長、松本正道氏だ。友人たちと何の気なしに始めた診療所が、いつのまにか地域に欠かせないものとなり有馬で5つの医療施設を運営することとなった。高齢化が進む中、松本医師率いる医啓会の目標は医療と介護の一体化にある。その理念とこれからの夢を聞いた。

アルバイトのつもりで始めた診療所 「開業の動機は不純でした」と笑う松本正道医師。神戸大学医学部からそのまま大学に残り研究者としての道を歩んでいたが、大学の給与だけでは学会や書籍などかさむ研究費に足りない。経費を診療のアルバイトで補うことにしたが単発では効率が悪い。そこで仲間と一緒に診療所を開くことにした。「アルバイトに行くなら診療所やるかという程度の本当に軽い気持ちでした」しかし、である。当時は地域に医療機関が少なかったため多くの患者さんが来られるようになった。開業するつもりはまったくなかったが、結局大学を辞め有馬の診療所に専念することになった。「大学には私の代わりはいますが、診療所は私一人。いなくなったら困るのは患者さんですから。教授には約束が違ふと怒られましたが(笑)」

以来、松本クリニックをはじめ有床診療所、サービス付き高齢者住宅、グループホーム、訪問看護ステーションなど有馬地域で医療資源を増やしてきたが、そのどれもが地域の声にその都度応えてきた結果だという。「有床診療所を始めたころです。肺炎の方が病気は治ったのですが、入院生活で足腰が弱って帰れなくなってしまった。治っても自立した生活を失ったら本当に治したと言えるのかと疑問に思いましてサービス付き高齢者向け住宅を建てました。有馬で開業して34年、最期まで関わるには医療から介護まで一貫してやりたいと思っています」



医療から介護までの一体化は松本医師のライフワークとなっているが、その中心にあるのが有床診療所である。病床数19床以下と定められた有床診療所は、地域医療の担い手とされてきたが、国の方針変更により医療費を大幅に減額、多くの有床診療所が存亡の危機に立たされている。「確かにホスピスや療養病棟にしたほうが経費はおさえられますが高齢化社会の中では看取りもあり、急性期病床もあり、検査もありといった小回りの利く有床診療所が求められています。細分化してしまった現代医療では局部だけを見て森全体を見ない。病気ばかりをクローズアップするのではなくそれ以外の要因、たとえば精神的なケアなども大切な医療行為のひとつなんです」

医業とは終わることのない人生勉強の場 アルバイトのつもりで始めた診療所ではあったが今ではすっかり地域に頼られる医療施設となっている医啓会。松本医師が今思うのは恩返しだという。

有床診療所には内視鏡、CT、がん温熱治療器など有床診療所としてはできる限りの最新設備を入れています。新しい機器は患者さんへの還元になりますし、若い先生方へのモチベーションアップにもなります。医師が儲かったのは昔の話。利益を追うより還元していく方が充実した人生だと思います。医者である以上、治って喜ぶ、治らなかったら一緒に悲しむ、それが当たり前の原点です」

医者とは人生勉強を絶えずやっているようなものと語る松本医師。そんな学びの現場の一つが訪問医療である。「在宅診療が好きでよく一人で伺うんです。足腰が弱って歩けなくなったり、認知症だったり、お年を召した方ばかりですがそういう方々の昔話を聞いているとその活躍がありありと浮かび、本を読んでいるような気分になっておもしろいんです。私自身まだまだ足りないと反省したり、先のことを考えさせられたりします」

医師としての仕上げの時期に入ったと語る松本医師。

「寝たきり、認知症、そして病気にならないための予防医学に力を入れ、人間ドックなどで早期発見、早期治療に努め、訪問診療、入院、デイケアなどを含め医療と介護が一体化したサービスの提供を、当院の先生方やスタッフのみなさんとオーケストラのように一体となって前進していきたいと思っています」

最後に松本医師が開業以来続けている習慣を伝えて終わりたい。

— 寝るときは携帯電話を抱えています —